

論 文 審 査 の 要 旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

佐々木 寛季

主論文の題目
および

掲載誌・審査委員

題 目 Inverted Internal Limiting Membrane Flap Technique as a Useful Procedure for Macular Hole-associated Retinal Detachment in Highly Myopic Eyes

（強度近視眼における黄斑円孔網膜剥離に対する内境界膜翻転法の有用性）

掲載誌 Eye 2016 Dec 2. doi: 10.1038/eye.2016.263

主査 肥塚 泉

副査 田中 雄一郎

副査 岡田 智幸

[論文の要旨・価値] 黄斑円孔網膜剥離(macular hole associated retinal detachment: MHRD)は近視眼の黄斑円孔から生じる難治性の網膜剥離である。治療法として、黄斑バックリング術、強膜短縮術、経毛様体扁平部硝子体切除術(pulse plana vitrectomy: PPV)の単独、併用療法が行われていたが網膜復位率、円孔閉鎖率は低く、満足の得られる術式では無かった。近年、Michalewska らは巨大黄斑円孔に対する内境界膜翻転法の有用性を報告した。申請者らは、MHRDに対する内境界膜翻転法の有用性について後ろ向きに検討を加えた。対象は2009年10月～2013年10月に主に、聖マリアンナ医科大学附属病院にてPPV+内境界膜翻転法または内境界膜剥離を行った強度近視（眼軸長27mm以上）に伴う15例15眼である。矯正視力(logMAR 視力)、網膜剥離復位率、黄斑円孔閉鎖率の比較検討を行った。術前、術後1、3、6ヶ月に、視力測定、光干渉断層計を用いて黄斑円孔閉鎖の有無、後部ぶどう腫の有無を観察した。統計はWilcoxon検定、Chi-squared検定、Mann-Whitney検定を用いた。本研究は、聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会(承認2752号)の承認を得て行われた。両群の術前矯正視力、術後1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月の矯正視力は、内境界膜翻転法群は1.04±0.55、0.95±0.3、0.83±0.22、0.62±0.35、内境界膜剥離群は1.00±0.44、1.05±0.38、1.06±0.49、1.02±0.41と、術後6ヶ月後、視力は内境界膜翻転群で有意に良好であった。(p=0.045)。術前と術後6ヶ月の矯正視力を比較した視力改善は、内境界膜翻転群が0.41±0.29、内境界膜剥離群が0.02±0.36と内境界膜翻転群で有意な改善を認めた(p=0.021)。初回網膜復位率、初回黄斑円孔閉鎖率は内境界膜翻転群で各々100%、内境界膜剥離で各々55.5%と内境界膜翻転群で高い傾向を認めた(各々、p=0.056)。内境界膜剥離で初回手術時に復位を得られたなかった3例中2例で再手術を行なった。内境界膜剥離群の最終網膜剥離復位率、最終黄斑円孔閉鎖率は各々88.8%で、両群間で有意な差を認めなかった(p=0.398)。MHRDに対する内境界膜翻転法の有用性を示した、医学的価値の高い論文である。

[審査概要] 審査は主査1名、副査2名、陪席者数名で実施された。PCを用いた30分のプレゼンテーションとそれに続く30分の質疑応答が行われた。本研究の目的、結果と考察、結論と臨床的価値について述べられた。質疑応答では①女性に多い理由、②視力は有意に改善したが最終網膜剥離復位率、円孔閉鎖率は改善傾向に留まった理由、③術後、置換に用いるSF6とC3F8とでは結果に差は出ないのか、④硝子体の生成機構、⑤Glial細胞の種類、⑥術後うつ伏せを指示した理由など、多岐にわたる質疑がなされ佐々木君は概ね適切な回答をした。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 研究内容の発表と質疑応答を通して、申請者の研究推進能力、専門的知識などについて問題はないと判断した。英語能力は参考文献の一部を和訳することで評価し、十分と判断した。発表態度は真摯であり、今後の研究意欲も十分に感じられ、学位授与に値すると評価した。